



第 6 号

昭和35.2.1

兵庫県
赤松郡山崎町
教育委員会
青森郷土研究会

電話七五〇番

揖保川高瀬舟考 (二)

宇野正 碓

郷土研究会報第4号に新宮町平見、中村直治翁より得た高瀬舟圖書を発表した際、翁の伝承により幕政当時の状態を附記するを得たがその伝承を文献により裏付けし、見る。

(川筋村の御廻状)

布施孫三郎御代官播州赤松郡村々当亥御年貢江戸大坂御廻米於出石河岸積立え、綱干漢江川下ヶいたし候条川路通船差支候場所、掘換等いたし差支無之様取斗、且御廻米積船逢難風難波船等者勿論都而異変之儀有之節は其最寄西川附村々より不及難儀之様手当いたし御米簾末無之様取斗其段我等旅宿出石河岸蔵元幸助綱干漢蔵元宗十郎右両人方江早速可被相届候此廻状昼夜刻付を以早々順達留村より綱干漢蔵元宗十郎方江可相返候以上

亥十一月二十九日戌、上刻

布施孫三郎手代

森山繁蔵

右の廻状の要点を述べると、赤松郡北部地方は御存知の通り天領であつてこの村々より納められた年貢は大坂又は江戸に廻送されるのであるが先づ馬手背を以て出石の蔵元まで運搬せられ集積されると、年貢米廻送のため蔵元まで搬遷せられた代官手代によつて高瀬舟による川下げが行なわれる。勿論一応出石蔵元幸助から綱干漢蔵元成田屋宗十郎まで送られるが、川沿いの村々に対して川下ゲの予告の廻状が発せられ、村々順送りに受付時刻を附して送られる。最後の村から、綱干漢成田屋宗十郎に返される仕組みがあらかじめ整つていた訳である。

村々に対して要求されている点は

- (1) 高瀬舟通行不可能の川筋は掘換をする事
- (2) 高瀬舟難船等の時は、最寄の川筋の村々応急の処置を講じて、御米を粗末にせぬようにすること。
- (3) しかるのち、手代役人(出石蔵元止宿)と、成田屋宗十郎(綱干蔵元)に連絡すること。

しかも此廻状は川下ゲ開始の時のみ通知を行い、毎回船の下るごとには行わないと添書をしていることから、或いは以前には毎回、廻状を出したことがあつたらしい。

この廻状の宛名は、出石一綱干漢向の川筋岡孫村々に発せられた。即ち、中広瀬村、舟元村、須賀村、御名村、比治村、川戸村、宇原村、香山村、上笹村、下笹村、吉向村、新宮村、井ノ原村、草飼村、北村、皆

崎村、佐野村、宿村、嶋田村、日飼村、竜野村、半田村、町屋村、山下村、伊保村、野田村、新在家村、正条村、今市村、東用村、灰原村、真砂村、上河原村、中嶋村、上余部村、興丞村、の庄屋、年寄中に宛められてゐる。

× × ×

右の様に予告されて年貢米の川下ゲが行なわれるが完了すると「突粟郡村々其亥御物成、江戸、大坂御廻米、出石河岸より綱干羨江川下ゲ中難船難波都而異変之儀有之節は被致手当様去年中相融候処、此廻状迄に不残川下ゲ相濟候向、可被得其意候」と連絡が行なわれる。(へ順達方法前に同じ)

此の川下ゲ期間は冬季に行なわれるが、前出の予告廻状が享和三年亥十一月二十九日で終了連絡が翌年子二月五日であるから、二ヶ月余を要する訳で、文書には頭われぬけれども、此向川筋村々の人達の苦勞は、相当であつて川掘りは勿論のこと、事故発生時の関係村々の経済的負担は大きかつたと思われる。

× × ×

綱干羨成田屋宗十郎宛に廻送されて倉庫に入れられた年貢米の保管が次に大切なことで、火事と盗難の要心が必要となつて来るが、この警戒を地元の村々に依頼せねばならぬ。しかし、領地内の村と違い他領の事

とて領主にこの点依頼して、領主から下命して貰うより外に手段がないのである。

「(前略)……然ば孫三郎御代官所、播州突粟郡村々当辰 江戸御廻米、積立の爲め出役仕り此節同国出石河岸に罷り在り御米綱干羨成田屋宗十郎方江積下げ申候向、彼の地に於て御用中御米火盗非常之御手当等、村役人共江仰付けられ下され候様仕り度く存じ奉り候右之段、貴意を得らるべき旨孫三郎の申付斯の如くに御座候 以上 (筆者原文を書き下す)

森山 繁 蔵

十二月十七日

藤山十兵衛様御手代

小林源左エ門様

小原 彦九郎

脇谷林右エ門

外に、連署にて脇坂中務大輔様御役人寸様、京極能登守様御役人中様宛のものもある。

無事、綱干羨より御廻米を海路送り終つた時は勿論その由の連絡も行った。(未完)

河東の伝説 (四)

仇討地蔵

栗山宗知

夫栗郡山崎町神谷字カマツ子に一基の地蔵様がある。三段の角石の台に長方形の碑石を樹て、その上に蓮台に坐つていられる一尺五寸ばかりの地蔵村である。地上からは約六尺であるが、その碑石に「奉唱光明真言百万遍」と刻み、左側には「真言行者栗山儀石工門宗勝」右に「維管文癸六未年三月廿一日」と読まれる。文政六年(一八三三)は、まア百四十年程の昔だから、あまり古いとは言えないが、村内の人々は疫病に利益ありとして、昔は相当のお参りがあつたという。

いつの頃か、年代不詳であるが、旧藩時代のこと、村内の某が何者かに殺されて、下手人は不明のまま迷言入りとなつていた。被害者の一人息子は、何とかして父の仇を討ちたいと念願して、腕を磨きこの地蔵尊に願をかけていた。かくて幾年か過ぎた晩春の或る日、この息子が地蔵様の前を掃除していると、旅人風の一入が地蔵様の前の木蔭で休息、いつかうつらくと居眠りを始めた。すると不思議なことにその人に地蔵様がのり移つて、その息子の父を殺したのはこの俺だと

殺した有様を詳しく語つて聞かせた。そこで忽ち旧悪暴露して目度度く仇討をしたと伝えられている。

子守地蔵

右の地蔵様の敷地は、向口三向に奥行三向半ほどの十坪程度であるが、その後、戦死者の墓と栗山宗宣の記念碑、それに地蔵様一つが同居の形である。この一つの地蔵様は、木彫で非常に稚拙といふべきもので

徳

とくきや

御婚礼衣裳と实用呉服
と洋裁

本町通
電三〇四番

四角い木に頭だけ掘り上げたものである。昔は小供らが怪しいものだから引つ張り廻つたり、尻に敷いたり、誠によい小供の遊び相手となつていた。たまく通りかかりの村人が、勿体ながつて小供らを叱つて元の場所にお返しして祭つたという。ところが、子供を叱つた人は必ずその夜の夢に地蔵様が現われて、せつかく小供らと楽しく遊んでいるところを邪魔されたと言を述べ、以後小供らの自由にさせてやつて欲しいと申

渡されたという。こんなことが繰返されて夢枕に立られるので、地蔵様と子供らの遊びは益々はげしくなると伝えられる。

ときあがり

片岡醇徳著「兵乗那誌」の城山の古墟の項に、芳賀七郎という勇士あり、龍馬を秘蔵していたが、この事叔聞に達し、献上せよとの宣旨を受けたが手放し難く勅命に背くもの也とて官軍発向、岸田村迄寄せ来て聲揚しと記し、岸田の里に今も鯨あげというところありと出ている。いま残っている呼名は「ときあがり」でなく「ときあがり」といつているが、醇徳が書いてから二百五十年の歳月が流れているから、この位の食い違いは仕方がないと思う。尤もこの語は醇徳も信偽弁えがたしといえども人口に残りし故記し待りぬと後書きしている。



シンガーミシン
編機

前野ミシン店

本町・西町 (TEL. 416)

ところでこのときあがりと呼ばれるところは、岸田と矢原の両部落の界で、岸田のお宮から南側の高い切り岸の上をいうのである。高さ六七間もある岸の上の山裾原である。説をなす者は、長水合戦に秀吉軍がここに集合して鯨声をあげたので、この名が出来たともいうが、地の理から割り出したような説で、地名的には俄に同調できない。

山崎地区消防沿革

志水新次郎

消防についての記録は、いま何も残っていないので詳細なことはわかりませんが古毛の言い伝えを思い出して綴ってみたので間違っている点は御容赦下さい。旧藩時代には本多家中に武家火消というのがあった。これは武士ばかりで結成、家中の災害に出動するだけで町家へは出動しなかった。もともと家中屋敷と町家とは交通取締りが厳重で、土橋に土橋御門、聖旨幼稚園の上に中門、辻に熊鷹門、東麓沢松下さんの前に新御門、通り町と犬の馬場の境に鶴木御門があつて朝夕の刻限に門が閉閉され、夜間の通行は禁じられていた。火災の場合は昼間でも門を閉ざして通行止としたものである。

幕末の頃、本多侯が参観にゆかれる時、菊屋寅七（現山崎農協事務所のところ）で魚屋兼料理屋を渡せしむが、司厨修業の爲に江戸にお供して行ったが、江戸の花所謂火事場で活躍する町火消しの仁侠的な行動に感ぜられて、帰郷後同志を語らうて当町火消の強化に努力したと伝えられている。当時使用した消火器は、竜吐水という水鉄砲式ポンプ（現代第二分団に保存）を使用しておった。明治十七年四月、私設山崎消防組が設立された。人員八十五名。明治二十七年に公設山崎消防組に改編警察署長の指揮監督下に置かれ、人員増加、器具も最新式の手押ポンプを備えた。この腕用ポンプは舶来物で、筒先から出る水勢は竜吐水の比でなく、当時の人々を驚嘆させたものである。現在の自動車のA級と腕用ほどの違いで、このポンプは門前部落に予備用として備付られているが、竜吐水と共に文化財ものである。その後整備も強化され、大正十二年までに第一部から第四部まで出来、ポンプも腕用四台と纏まで備えられた。大正十三年に初めてガソリン手挽きポンプを購入、これが本郡機械消防の第一歩であった。この時は五部編成となり、昭和六年第三部に、同九年に第二、第四の西部にガソリン車を配置、部を四部制にして全部機械化されたのである。

戦時中は、大都市の空爆を守るため郡部の自動車ポ

ンプは徴発されたが、当町には一台もなかったことはむしろ幸いであった。第一分団の手挽車が自動車になったのは、昭和二十二年のことである。

昭和三十年町村合併により新山崎町が生れたが、消防団は従来のまま連合組織となつてゐるが、近き将来解体して一本となることは必至である。これが予備行幸として、去る三十二年十二月に第一機動分団編成、自動車一台配置、三十四年十一月第二機動分団を設けて同じく一台を配置された。（従来の第一分団を解体して）

最後に、歴代の団長氏名を参考までに列記します。

長谷川安平	田村 善吉	堀口 勝二
小林扇太郎	細口 増吉	志水 弥市
山下 重時	岡田 佐市	中村 圓吉
志水 弥七	志水新次郎	

史料 山崎名人名鑑 (五)

(九) 永 瀬 保 治
赤 松 円 裕

河東村ノ内中村の人永瀬保治は、旧山崎藩士で文政十一年山崎町に生れた。諸書に永瀬彦惣と書いてあるのは通称で諱は保治である。幼少の頃藩主本多忠隣に

近習として仕え、長じて学向に精勵して深く和漢の書籍に通じたので、山崎藩思齋館の助教に登用され教鞭をとっていた。癸藩の後、明治十八九年の頃より山崎町門前の八幡神社を初め、諸社の神官を歴任して、播磨一の宮伊和神社祢宜として奉職していたが、同二十五年老を以って任を辞し、神野村、内杉ヶ瀬に住んで好きな歌文を作り閑日月を楽しんだ。二十八年頃河東村ノ内中村に移住し、家塾を開講して村内子弟の教育に従事した。其の後十数年間は全く名利を離れて薫陶した効果は大なるものがあつた。翁は性質恬淡にして清食に安んじ最も和歌をよくして詠数万首におよんだ。明治三十九年十一月二十五日大日本歌道奨励会々長鍋島候爵より再誦を賜り名誉を挙げた。また謠曲に堪能して家塾の子弟教育の傍、各地の有志者ならびに村内青年に謠曲を教授して青年を清祭に誘導した功績も挙ぐべき事蹟である。明治四十五年病んで歿した。時に享年八十五歳であつた。

(十) 藤村九郎左衛門

藤村九郎左衛門は室町時代明応年間頃の茶河内村の百姓である。百姓といつても姓を名乗る有力な家柄であり、茶河内村の開拓に尽した人で播磨一の宮とも交渉があつた。明応四年(一五九五)六月九日に藤村九郎左衛門は、毎年本役五百文を一の宮社家大井祝へ納める

薬のレポート

ひがしち

福原町

TEL. 一〇九

条件でかな山神田を買いうけている。

それより二十三年後、永正十五年(一五二八)三月に返議を求められ、当時の耕作者藤村吉湾(年代を推するに九郎左衛門の子)は二十一日に一の宮にかな山神田を返戻し沽券を紛失していたので別に譲り状をしたためているから其頃に九郎左衛門は死去したのであろう。今なお明応四年六月九日藤村九郎左衛門金山神田買券写と、永正十五年三月二十一日藤村吉湾金山神田売券が一宮町須行名に鎮座ます播磨一の宮元国幣中社伊和神社に社蔵してある。

(十一) 早瀬正義

正義は赤松晴政(播磨の大名)の四男、天文三年(一五三四)に生る。始め佐用郡早瀬村早瀬城に居城し、地名に因り氏と爲し早瀬帯刀と稱した。其後永禄年中より兵乗郡拍野郷拍原城主となつた。(現兵乗郡山崎町城下地区金谷の西の山にそびえる長谷山に拍原城跡が

ある。織田時代天正五年（一五七〇）十一月佐用郡上月城主赤松政範が羽柴秀吉と合戦に及んだとき、正義は政範に与力して上月城に籠城し防戦大いに努めたが、衆寡敵せず、十二月三日政範一族は重臣と共に、上月城内大広間に於て酒宴を催し歌を詠じ終に切腹した。時に年四十四。宿雲院殿清林秀嶺大居士と諡され佐用郡青林寺に葬られた。因みに早瀬家の旗の紋は三日月紋であった。

会報第二号の七頁（二）前野真門の伝に、辞せとあるは、花の誤り。

明源寺考 (3)

杉山よしあき

②第十二代、独眞院堀江一法法師は、みづから独眞

陶磁器 建築材料

塚本陶器店



本町通
電話五六〇番

庵と号している。文政三年九月、第十代惠実法師の子

として生れる。幼名美代庵。二才の時母に別れ五才まで赤穂釜島西光寺の祖母のもとにおいて育てられ、十四才より明証寺実誠得業、御立常徳寺勝兼司教の両師について宗学を学び、弘化三年正月、本願寺より明源寺第十二代住職を命ぜられてゐる。（得業、司教といふのは真宗本派に於ける学向の上の階位のことである）同年十月新宮石原清右エ門の娘小鶴を迎えて室とする。嘉永二年三月より山門の夜門を再建新築し、椀一切は谷林善七殿。捨一切は谷林与平、福岡利右エ門殿。石材一切（沓石、セリ石）は坂井勘六殿。金具一切は福岡織石エ門殿。瓦一切は藤多平九郎殿の寄進。その他の諸入費四貫目。総合計費用五百両の募財世話人は八木吉平、岡田与平殿の尽力によつてゐる。即ち現在の山門がそれである。

嘉永四年四月二十日、ある事件が起り、時の奉行武向官平殿始め、諸役人は退役を命じられ、光〇寺、法〇寺殿は壘居、淨栄寺瓦樹は追院となり、その他の寺院は百日の閉門を命ぜられてゐる。

安政三年（一八五七）二月、梵鐘を領主に取り上げられ大砲を鑄造する。（明源寺外七ヶ寺）安政四年三月親鸞聖人六百回大遠忌法要を執行する。安政五年東本願寺焼失する。

明治六年より姓を坂江と称する。明治十一年一月二十四日午后一時、願壽寺後堂より出火し、役僧部屋、本表堂を除いて、本堂始め諸建築物悉く焼失する。

明治十二年四月梵鐘を新鑄す。経費四〇〇円である。七十二貫。(この梵鐘は昭和十七年政府の金属回収に依じて供出した)同年十一月二十日より廿四日まで崩基梅杖法師の二百五十回忌を執行する。上納金一百円である。一法々師は大徳右のような記録を、飾西郡玉手村善正寺井上南窓の下にて明治十五年十月十五日に誌し遺している。

明治十七年二月に明源寺の境内に高さ約三メートルの碑を建て、その裏に自作の和歌を彫刻している。明治二十八年十一月二十日入寂す。行年七十六才。二男二女あり。(一)長女松枝(新宮石原武市へ嫁す)。(二)長男一空、幼名三代丸。(三)次男一道(泉州堺市に至り住む)。(四)次女ツル卫(印南郡塩市善覚寺藤郷了澄に嫁す)

⑬ 第十三代、一空法師。幼名三代丸、第十二代一法法師の長男である。嘉永七年七月に生れ、長じて寺田善行寺の娘タツエを室に迎える。第十三代をついだがその頃は**禿**佛**棄**親の思想の盛んな時であったので、一時過って僧籍を脱して、身を神職に投じた。そのため

一番 買いよ

服地・洋品・学生服・毛糸



本町 死の身奉仕の423

寺院は荒れ廃寺に類するようになった。時に一空法師大いに悟るところがあつて、薩摩の国に行き南教に艱難辛苦の末、ついに薩摩郡西水引村淨光寺の住職となつた。

辨圓の墓

赤松 円琳

淨土真宗の御開祖と仰がれ、一世を風靡した天下周知の名僧、親鸞上人の教化を膺み、常州板敷山に於てこれを害さんとして成らず、上人の卓越した偉大なる高德の前に、心より慚愧稽伏して、悔悟の涙にむせび遂にその仏弟子となり、上宮寺の崩基となつた有名な傑僧、明法房弁円の墓と称する五輪の塔が山崎町川戸にある。私は昭和三十四年十二月二十五日の朝、弁円の墓を訪ねた。

道々弁円の墓所をたづねると、村人たちは、べんねんさん[〃]の墓はと、丁寧に教示して、参拜したことをよろこぶかの如く思われた。弁円の墓は川戸字奥所^{おくじよ}というところにあるが、読んで字の通り、川戸の奥地にして山近く、古老の語る話によれば、山奥へかけての道は、近年まで狭い道であったが、山から材木を運び出すに便利なよう数年前道路改良工事をしたもので、山越しをすると山崎町須賀沢へも出られるし、また安富町長野及び塩野方面へも行けるといふ。尚、墓の近辺には、戦争犠牲者として雄々しく散華した英霊を合祀する川戸部落の戦死者共同墓地がある。また磐筒之男命と磐筒之女命らを祭神とする岩田神社も上ノ宮の山麓に鎮座されている。

弁円の五輪塔は、岩田神社及び戦死者の墓地へ、参拜するまでの道順に当り、水田の側にある細道を、左へ入ったところにして、道からは近く、良く見える場所、縦横共約十三尺で、周囲に石を並べ、その一面をコンクリートでぬり堅め、中央に台石を二段敷設されている。一番下の台石になる部分は、約五尺四方にして、二段目は約三尺四方で、共に正四角形の台石はその高さ約二尺余り、その上部に建てられている墓標、即ち五輪の塔は約四尺の高さである。コンクリート地上より、総高は約六尺に余る大きなもので、創建

は江戸時代のものと考えられ、お茶や水を供える人があるらしく、茶碗類が十数個台石の上に並べてあり、それに氷が張っていた。また平坦な墓地内の周囲には小五輪の形を有したものの十一基と、小さな丸石が沢山置き並べてある。墓の右隣には、周囲約二尺余り、高さ約四間に達する松の木が墓じるしに一本植えてある。川戸の古老に話を聞くと、べんねんさんのお墓は、大変荒廃していたものを、地主の金山作蔵さんが改修して、新規におまつりされたのは今より五十有余年前で、現在でも金山真岩さん宅が管理され祭祀供養されるといふ。

書類には弁円とあるが、川戸の人々は誰もべんねんさんと呼んでゐる。板敷山の弁円の墓は知っていても、生れたのが川戸ということには信じぬ者もあり生れたのではなく、この地で遷化されたのではないかと言ひ、その為菩提を弔うべく墓を建てたとの説を語

化粧品・糸毛

すどや

本町通

TEL. 337



る人もあり、地元といわれる川戸でも、弁円の川戸産
についての真偽は未だ詳らかでない。しかし大正の初
めに法性寺の住職らが提案して、弁円の法要を執行し
たと私は聞いています。
(未完)



郡北見学 旅行記

安井 東 一



昭和三十四年十一月一日、半晴。本会主催の見学会
の参加者六十七名。神姫観光バスで午前七時山崎発。
三津橋を渡った頃より先達の福井政男先生が長水山を
望みつゝ、事面白く長水軍記を講演して下さる。次に
与位の洞門の説明、更に木の谷には美玉神社の由緒
と解説など至れり尽せりの説明は一同に深き感動をあ
たえた。

「伊和神社」に到着。すがくしい神苑に心神清き心
地となりて参拜を終え、秘宝数点と古文書を拜観する。
それから程なく安積に再び下車、有名の高石垣を望み
つゝ、阪道を上り、「大成庵」に着く。眺望絶佳、しか
も庵主特別の好意にて宝物の陳列をして頂き、一行を
待っておられた事は感謝に堪えない。宝物は古文書は
もとより絵画彫刻も多く、仏舍利塔の如きは郡内唯一

正確
廉価
八木
時計店

のものであろう。安積よりは道を左にとりて、日見谷
上野を経て、波賀町を奥へくと進む。バスより眺め
る禰保の清流と奇岩、岷々たる山容、実にこの辺は山
水の宝庫である。原の橋にて別仕立のトラックに乗車
立ちん棒のまじ、八キロの山道を川に沿うて進む。ト
ラックは相当に動揺するが、一同一団となつて右に左
にやつと辛抱をする。ひらくと降り来る紅葉が頭に
肩に当るのも凡流である。かくて溪谷美を縫いつゝ、
「赤西営林署事務所」に着く。山中にしては行届いた
座敷で昼食をした、む、事務所前の溪谷は、初紅葉し
て燃えるが如き色彩が黄に赤に、或は緑に、何人とも
言えぬ景観であつた。庭前紅葉を背景に一同記念撮影
をした。かくて元の道をトラックにて原橋に戻り、一
路引原へ急ぎ、「音水湖」のダム堰堤に駐車。暫く自
由行動。鳥取方面より来た観光バスも四五台停車して
いるという豪華ぶりであつた。それから又バスにマ長

源寺前まで行き、寺でゆっくり一同休憩した。寺から湖面を眺める風景は稀に見る絶景である。この近傍にある有名な円型新築校舎も見学させて貰い、物珍しく又新しく感じた。

かくて心ゆくまでダムに親しみて後、一路帰路につく。車内には相不変福井先生の大サービズに一同も思い／＼に隠し芸も出、満足して帰峙したのは午後四時半であった。

郷土史料解説

(五)

安井俊二

播磨鑑

正しくは「地志播磨鑑」であるが、播磨鑑で通っている。印南郡平津村へ加古川市米田町平津の平野庸脩が四十余年の努力を結集して、宝暦十二年(一七六二)に完成した播磨全郡の地誌である。その価値はすでに定評があり、明治四十二年に播磨史談会は七百五十部の限定出版をしている。然し昭和三十三年に播磨史籍刊行会がA5版四七九頁の善本を刊行したので、そのおかげを蒙るものが多い。各郡別に神社、仏閣、名所旧跡などを記載しているが、宍粟郡のところは、高、村数と郡名の前書あり

て、神社の項に「一宮伊和大明神」外八社。仏閣には「船越山瑠璃寺」外九ヶ寺。名所旧跡並和歌には「くらかけ岩」外三十一ヶ所。古城跡並構居には「山崎山城」外十三ヶ所が記されている。和歌、俳句なども随所に引用されて、その調査引証のなみ／＼ならぬ御苦心が察せられる。

峰相記

貞和四年(三三六)に峰相山鶏足寺に参詣した著者が老僧から仏教諸派の概要、神社仏閣、旧事、戦乱の事など播磨の事蹟を向答形式で聞いた形式の書である。とにかく室町初期の貴重な文献で、本郡では一宮や安志の伊佐々王などの話がある。峰相山は書写の約一里西に当り盛事には三百余の別院があったと伝えられ、室町期より衰えて元正年間には郷民のため焼滅ほされ今は廃墟となり何も残っていない。本誌の地誌的興味は、播磨国の惣田教の変遷、郡の分合など得がたい文献の一つである。



品物材料
化粧小
山田町
TEL. 549

…消息…

山崎高校地理歴史班

では、一昨年秋、一宮町黒原、小椋清吉老人が郡内唯一人の木地職の継承者として杓子造りを営んでいることを発見して以来、郡内に伝わる木地屋の伝承、技術などについての研究を続けて来たが、その研究結果を「播磨における木地屋の研究」として昨秋、東京専修大学主催の全国高校文化部コンテストに応募し、入選の栄をえた。内容は

但馬、因幡、美作、播磨の江戸時代文献に見える木地屋、外四項目

本月、研究内容を「地理歴史研究」誌に発表発刊。(附記)若し御希望の方があれば実費にてお領け致します)

山崎町勢要覧

山崎町では、庁舎新築記念号として一月一日発行。週刊誌版百頁。第一編新庁舎より第十五編まであり、写真、図版を入れて立派な出来である。



山崎神社祭典

昨年十月二十四日山崎神社、蒼竜稲荷神社両社の秋祭典を執行、参会者三十数名。参拜后、中和堂で座談会を用いた。当日有志の方より十本の赤幟の寄贈をうけ境内を賑わした。

記念講演会

同日午後一時より町役場会議室で、小学校教育友会後援の講演会を開催。講師は神戸新聞社員檀上重光氏で、県下調査の体験談など有意義な話があった。参会者五十余名。

見学会

別記のとおり十一月一日那比引原まで行きました。次回五月の予定。日帰り好適地を皆様から推薦して頂きたいと思えます。

会員名簿(六)

高原 啓九 (伊沢町)	名倉 清治 (西町)
谷林 一 (西町)	小野 和夫 ()
三木 清治 (宮上野町)	三木 行子 (門前)
杉村 一樹 (神姫支店)	鈴木 とり (西鹿沢)
長尾竹次郎 (西町)	八木 誠亮 (本町)
三木 良秀 (本町)	高野 薫 (本町)
杉谷収治郎 (本町)	安田 武島 (山田町)

ゴム履物、雨具



山田町 電話 三四七番